B-7

-less と-free の語形成再考

萩澤大輝

hagisawa_daiki@yahoo.co.jp

要旨　本発表は欠如を表す形容詞を作る英語の形態素-less と-free に関する研究を批判的に検討するものである。Kikuchi（2019）はコーパス調査に基づき、N-less X と N-free X の意味に「潜在的生産者」および「意図的除去」という一般的な特徴づけを与えている。しかしこれらには反例が存在し、スキーマとしての地位を維持できないという難点を抱えている。一方で Aronoff（2020）は-less と-free に棲み分けがあるという想定のもとで両者の使用実態を調査し、-free が接尾辞化していると論じている。しかし Aronoff の議論が依拠する「内在的な悪さ」という概念は擁護が困難である。また彼は N-free の事例が一貫して「ある対象を持たず、そのことは良い」という評価を持つとも述べているが、この一般化も不十分な観察に基づくものである。先行研究のこうした問題を受け、認知言語学の立場から下位スキーマの重要性や概念分析の可能性などを論じる。

1. はじめに

英語には-less と-free という意味ないし機能の類似した 2 つの形態素[1]が存在する。ともに名詞から形容詞を派生させる働きを持ち（e.g. end**less** / tax-**free**）、〈欠如〉をコード化するという点で共通している。しかし-less と-free は完全に互換的に使用できるわけではない。そのため、それぞれがどのような場合に使用されるかを解明することが語形成研究の一つの課題となる。これに取り組んだ近年の有力な研究として Kikuchi（2019）と Aronoff（2020）がある。本発表は両研究の批判的検討を通して、-less と-free の語形成についてより深い理解を得ることを目指す。なお形態論・語形成の研究には様々な理論的立場があるが、発表者は枠組みとして認知言語学を採用している（cf. Schmid 2016）。

構成は以下の通りである。2 節では Kikuchi（2019）を取り上げ、そこで提案されたスキーマが言語事実に照らして妥当でないと論じる。3 節では Aronoff（2020）を検討し、その議論は前提と観察に不備があると指摘する。4 節では両研究を総括し、さらにその先へ進める道筋を示す。5 節はまとめである。

2. Kikuchi（2019）

従来、-less と-free に関する研究は主にその語基（base）となる名詞に注目する傾向があった。一方 Kikuchi（2019）は N-less や N-free が修飾する先の名詞に焦点を当て、丹念なコーパス調査を行ったものである。しかし以下で示すように、Kikuchi の提示する一般化は問題を抱えている。

2.1 議論の骨子

Kikuchi（2019）は概略「ある 2 つの語について、その 2 語に共通して共起する語のタイプ数が少ないほど、両者は意味的に異なる可能性が高い」のような想定のもとにコーパス調査を行った。その結果、（直感的には意味の類似が予想されそうな）同一の語基を持つ-less と-free のペアであっても、共起名詞の傾向が大きく異なるケースが存在することが明らかとなった。

---

[1] -free を接尾辞と見なすかに関しては立場が分かれる（cf. Bauer et al. 2013: 354）。

smokeless と smoke-free のペアを例に取ると、smokeless は「吸わないタイプの」ないし「煙の出ない」のような意味であり、tobacco および powder と共起する強い傾向を示す。一方で smoke-free は「禁煙に関する」「禁煙の」のような意味であり、law や environment など「法令」や「場所」を指示する名詞と共起する傾向がある（以下は COCA から引用されたもので、省略や強調は Kikuchi による）。

(1) a. ... black powder was replaced by a **smokeless** *powder* called cordite. (Kikuchi 2019: 61)

b. Many community health organizations are eager to participate in efforts to achieve **smoke-free** *workplaces*. (Kikuchi 2019: 60)

Kikuchi はこうした観察を積み上げたうえで、小括として（2）の一般化を提示している。すなわち、共起名詞 X が語基 N の**潜在的生産者**であれば N-less X の使用は自然となり、X から N の**意図的除去**がなされていれば N-free X が選好されるということである。たとえば、powder（火薬）は smoke（煙）を潜在的に生産するものであるため smokeless powder（無煙火薬）が自然な表現となるわけである。なお、ここで「潜在的生産」や「意図的除去」が必要条件ではなく十分条件に近いかたちで提示されているという点に留意されたい。

(2) a. If a collocate X is a potential producer of the entity N, the use of *N-less X* sounds natural when we simply mean 'the lack of N in X.' （Kikuchi 2019 62）

b. If we mean 'the lack of N in X' in the sense of making the entity N removed from X for some purpose, the use of *N-free X* is preferable. （Kikuchi 2019: 63）

Kikuchi は議論の総括として N-less X と N-free X を構文形態論（Construction Morphology; cf. Booij 2010）の表記法でスキーマとして提示する。それによると N-less X と N-free X は意味論ではいずれも「N の欠如」を表すという点で区別がなく、語用論に上述したような違いがあるとされる。Kikuchi の枠組み内で意味論と語用論がどのような位置づけにあるかは判然としないが[2]、スキーマは事例すべてに共通する性質を捉えるものであり、かつ語用論的な情報もスキーマの一部としている以上、Kikuchi は最終的に「潜在的生産」や「意図的除去」を必要条件と見なす立場を採ったものと考えられる。

(3) a. $[[N_m\text{-less}]_{Ak}\ N_i]_{NPj} \leftrightarrow [SEM_i\ [\text{without } SEM_m]_k]_j$ (Pragmatics: SEM_i is potential producer of SEM_m)

b. $[[N_m\text{-free}]_{Ak}\ N_i]_{NPj} \leftrightarrow [SEM_i\ [\text{without } SEM_m]_k]_j$ (Pragmatics: SEM_m is intentionally removed from SEM_i)

（Kikuchi 2019: 63-4）

2.2 -less について：「潜在的生産」の検討

（3a）は必要条件と理解するのが自然だが、だとすると（4）のように Kikuchi 自身があげる例の中にすら反例が見つかる。上で見たように、潜在的生産が火薬と煙の間などに成立する関係と考える限り、ラム酒が氷の、子供が父親の潜在的生産者だという主張は維持しがたい（あるいは、控えめに言ってもどういう主張なのか理解が困難である）。Kikuchi 自身この難点に自覚的であるようで、こうした例には

[2] Kikuchi（2019）の内部でも混乱が見られる。Kikuchi は smoke-free policies は煙の欠如を指示（denote）しないと述べているが（pp. 60–1）、これは（3b）のスキーマと矛盾するように思われる。

潜在的に関与する（potentially involve）のようなパラフレーズを与えて対応している。

(4) iceless rum（氷の入っていないラム酒） handless Segway（ハンドルなしセグウェイ）
cloudless morning（雲ひとつない朝） fatherless child（父親のいない子供）
（Kikuchi 2019: 61, 62, 64; 括弧内は発表者による）

潜在的生産と潜在的関与は、両者が互換的であるような特異な用語法でない限り、異なる規定ということになる[3]。その場合、この 2 つは（包摂関係にあるならば実質的には潜在的関与のみが）十分条件を意図した規定だったと理解することができる。この路線での解釈は（2）の書き方を見る限りでは無理のないものと思われる。もちろん潜在的生産のみをスキーマに指定しているという点は誤解を招くものであるが、Kikuchi（2019）の主張をこのように受け取ると（4）のような例が存在すること自体は反例とならずに済むことになる。

しかしながら、潜在的関与を十分条件として取り込むという措置は Kikuchi の議論を決定的に損なうものである。これほど該当範囲の広い規定では、-less のみならず-free の事例もその大多数が当てはまるため、両者の適切な区別には失敗してしまう。たとえば Kikuchi は toll-free number（フリーダイヤルの番号）という例をあげている（p. 62）。当然、電話番号は通話料（toll）と潜在的な関与を持つだろう。しかし toll-less number は自然な表現ではない。このように、実際には-less だと不自然な表現であっても自然に使えるという誤った予測をしてしまうのである。

2.3 -free について：「意図的除去」の検討

-free についても-less と同様の議論が成り立つ。まず（3b）の「意図的除去」を素直に必要条件として受け取ると反例が生じてしまう。たとえば次の（5）は雑誌記事の見出しだが、本文を読む限り、当該の子供が何らかの目的で patience（我慢強さ）を意図的に除去するような操作（薬物投与、外科手術など）を施されているという事実は確認されない。この patience-free は単に「我慢できない」（impatient）ほどの内容を読者の目を引く言い回しで表現していると解するのが自然である。

(5) **Patience-Free** *Child* Calls 911 to Order a McDonald's Happy Meal and Promptly Hangs Up
(*TIME*, November 7, 2019; 強調は発表者による)

Kikuchi 自身も care-free（心配事のない）という語の存在に触れているが（p. 59）、こうした心的過程のたぐいを意図的に除去することは一般に困難であり、そうした意図的除去がない場合でも N-free は使用されうるのである。そして、こうした反例を回避するために意図的除去を単なる十分条件とするならば、（3b）を N-free X 全体のスキーマとする主張は維持できなくなってしまう。

さらに「意図的除去」という特徴づけが問題なく成立すると思える例についても慎重な検討を要する。remove あるいは「除去」の多義性に依存した分析になっている可能性があるためである。たとえば Kikuchi は salt-free bread（無塩のパン）を分析に含めている。これに意図的除去があるとはどういうことだろうか。魚から骨を取る場合に典型的に成り立つような「ある特定の個物についてその数的同一性を

[3] Kikuchi（2019: 63）には“The entity X in *N-less X* potentially produces the entity denoted by N (or X involves N)”とある。

維持しつつ一部を外部に移動させる」のような意味であれば、それが salt-free bread に当てはまらないことは明らかである（もともと塩を使わずに作るのであって、塩入りのパンから塩を除くわけではない）。別の意味での除去を意図していたのであればその内実を説明する必要があったと思われる。この論点については 4 節で改めて取り上げる。

3. Aronoff（2020）

Aronoff は英語形態論の第一人者であり、近年では競合や棲み分けなどの観点から語彙を分析する試みに携わっている。Aronoff（2020）はその一環として位置づけられる研究である。母語話者の直観を活かした有益な示唆を持つものであるが、議論の細部には不備が見られる。

3.1 議論の骨子

Aronoff はまず cordfree と cordless に着目する。いずれも同一型の掃除機を描写することが可能だが、前者は後者よりも何かしらすぐれている（somehow better）という印象もあると内省を報告する（p. 56）。したがって、-free は-less とは違って〈欠如〉にとどまらない微妙な意味合いを持ち、それゆえ両者には棲み分けが生じているという予想ができる。

次に彼は *Oxford English Dictionary*（OED）の記述を参照し、自立語の free と N-free には違いがあると指摘する。欠如を表す自立語 free の例を見ると blemish（傷）や nuisance（面倒）のように否定的評価を持つ名詞と共起している。一方 N-free は child-free（積極的選択として子どもを持たない）や gluten-free（グルテンを含まない）などの例があげられているが、child や gluten の指示対象は内在的に悪い（inherently bad）わけではないと指摘する。Aronoff はこれらを踏まえ、N-free について「良くない対象を持たない」から「ある対象を持たず、そのことは良い」に意味変化することで、単なる欠如だけでなく追加的評価も持つようになっているとまとめている。

以上から、-free は単なる複合語の後部要素から独自の意味を持つ接尾辞にステータスが変化している可能性があるという示唆が得られる。Aronoff はその判断基準として、Olsen（2014）に従って次の 2 つを採用すると述べている[4]。

(6) a. the suffix must have a different meaning from the free form
b. the meaning must be consistent across occurrences （Aronoff 2020: 56）

この接尾辞化仮説を検証するため、N-free の生起例（occurrences）に一貫して追加的評価が観察されるかを経験的に調査した。具体的な手順としては、OED に記録されている 1600 件の N-less とそれに対応する（共通の語基を持つ）N-free を手作業で一件ずつウェブ検索し、目視でその内容を確認するというものである。その結果、ambition のように「それを持たないことは良い」という評価が文脈なしには想像しにくい名詞についても、“the **ambitionfree** [*sic*] life of the bum”（ぐうたらの目標を持たない生活）のように、追加的評価のある自然な実例が一貫して観察された（p. 61）。パイロットスタディー的な性格の研究であるが、この調査で観察された X-free のデータに関する限り「ある対象を持たず、そのことは良い」という記述と明らかに矛盾するような反例は一件もなかったと報告している（p. 63）。

[4] なお、発表者が確認する限り Olsen（2014）にこのような基準は見当たらない。

3.2 「内在的な悪さ」の検討

-free の意味変化の前提に関わるが、そもそも〈欠如〉義の自立語 free の共起名詞は常に否定的評価を持つという想定は疑わしい。現に彼が参照した OED の項目には自立語 free について以下のような例もあがっている（強調は発表者による）。気泡や重力のような自然現象が他の要因と独立に悪さを持つという立場は擁護することが困難、あるいは少なくとも一定の正当化を要すると思われる。

(7) 1860 J. TYNDALL *Glaciers of Alps* i. xix. 135 [Glacier] Ice, singularly **free from air-bubbles**.
（OED, s.v. free *adj*. II, 9.c）

(8) 1962 *New Scientist* 5 Apr. 807/2 Throughout the long coasting time, the fuel has been **free of the pull of gravity**. （ibid., IV, 21.b）

Aronoff 自身も引用する free の意味記述は immune from [...] something **regarded as** harmful or undesirable のように悪さの非内在性を示唆するものである。つまり「悪さ」が成り立つにはそのように判断する主体が必要であり、その判断は場面に相対的なのである。たとえば、透明性を審美的に評価する主体や場面などがあれば気泡は「悪い」ものであるが、コンクリートの耐久性を評価するような主体・場面があれば気泡は望ましい対象だということになる。

ただ、大まかな傾向として彼の観察は適切なものである。blemish や nuisance は否定的評価が（内在的というよりむしろ）慣習的に組み込まれており、一方で child や gluten はそうではない。Grabias（2016: 96）の言い方を用いるならば、ここには（広い意味での）主観化が生じている。すなわち、免れている対象を表す名詞にかかる制約が弱まり、慣習的な悪さがなくても主観的に悪いと捉えられる対象ならば、それを表す名詞は(-)free とともに使用できるようになったのだと言える。

3.3 「追加的評価」の検討

N-free の例は「ある対象を持たず、そのことは良い」という評価を持つという記述に反例がなかったという件に関しては、観察範囲が限定的であったことに由来すると思われる。この研究は OED に大きく依存するかたちで検索を行っているため、調査の対象になりうる語に制限がかかってしまっている。これは Aronoff 自身も課題と認めている点である（p. 63）。

ここで再び Grabias（2016）を参照すると、N-free には近年 zona-free（透明帯のない）や nuclease-free（核酸分解酵素のない）のように一般的な欠如を表す、つまり追加的評価のない例が生じているという指摘がすでになされている（Grabias 2016: 96, 215）。同様に（5）の patience-free も反例となる。(-)free の史的発達の詳細については Grabias に譲るが、一般に、高い頻度での使用が長期にわたって続くうちに高度に意味の希薄化した例が生じるということは、ごく自然に予測される事態である。

4. 応答

4.1 分析の指針

以上 2 つの研究には、(i) ある種の前提に引きずられて議論に不備が生じた、(ii)「母語話者の実際の知識」と「分析者による理想化」が必ずしも明確に区別されていない、という共通点が指摘できる。

Kikuchi（2019）はコーパスの代表性などについて改めて考えさせるものである。コーパスのデータは膨大といえどもサンプリングされたものであり、当然ながら実際の言語使用はそれよりはるかに多様である。その全体に共通するスキーマを取り出そうとすれば極めて抽象的なものになることは必至であり、「潜在的生産者」のように具体性の高い指定が高次スキーマにまで残るとは考えにくい。Kikuchi 自身 potentially produce を維持できず部分的に potentially involve と規定を緩めてしまっているのは、こうした事情によるものと考えられる。N-less X 全体や N-free X 全体のスキーマに関心を持つのならば、むしろその緩める方向を徹底し、極端に抽象的なスキーマを記述していくことになるだろう。あるいは個々の母語話者が実際に持つ知識の把握を志向するのであれば、非常に具体的な下位スキーマの記述を充実させることが現実的と思われる。

Aronoff（2020）は接尾辞化の基準として意味変化を採用したことでバイアスがかかり、(7)（8）の例を見落とした可能性がある。そもそも、接尾辞というのは分析者が人為的に設定するカテゴリーである。まず解明すべきは-free をはじめとする個々の形態素の具体的な振る舞いであって、それに「接尾辞」というラベルを貼るかどうかは分析の対象というより手続きに関わる二次的な問題である。

4.2 議論の深化

認知言語学の実践には使用の分析だけでなく概念分析という面もある。すなわち、そもそも〈欠如〉とは何か、を考えるという分析の方途もあるわけである。

例えば Kikuchi の検討において「salt-free bread に関わる除去とは何か」という問題点を提起したが、ごく概略的に述べると、「あるカテゴリーの標準的な個体像との比較において、きわめて一致度の高い部分全体関係が感じられるような対象を作成する」のように考えることで整合的に理解できると思われる。無塩のパンは塩を使ったパンと（心的に）比較することで塩の有無という差分が「除去」によって生じたかのように捉えられるのである。これは一般に仮想変化と呼ばれる現象である。

この議論を敷衍すると、一般に〈欠如〉は部分全体関係を概念的な基盤として持つと言える。ここで重要なのは、身体部位のような物理的な部分全体ではなく、概念領域における部分全体を想定するということである。これにより Kikuchi の困難に解決が与えられる。たとえば smokeless powder は「火薬が煙を出す」という典型的事象を全体として喚起し、それとの比較において、当該の火薬は煙という部分の不在が際立つ（すなわち smokeless）ということになる。fatherless child でいうと、子供は父親を含む全体を概念的に喚起する。ここで「全体」にあたるのは典型的な家族像である。その部分である父親が典型像との比較のうえで不在であることを表すのが fatherless という表現である。同様に iceless rum もラム酒の典型的な飲み方との比較を考えれば自然に説明できる[5]。

また N-free に一種の望ましさがあるということは Aronoff を始めとして広く指摘される点であるが、この一般的な特徴づけと Kikuchi の「意図的除去」は行為論的な考察によって接続することができる。単なる動作とは違って意図的な行為には目的があり、それが達成されることは行為という概念の性質上望ましいものである。わざわざ何らかの対象を除去するという行為に及ぶ場合、それを意図した通りに取り除くことができたならば、その結果は当人にとって望ましいものとなる。

---

[5] 一般に料理には複数の要素（食材）が関わり、その要素の置換は臓器移植などと比べて容易であり、置換しても同一の料理として認識されやすいといった事情がある。-less や-free が「特定の食材を抜いた料理」を表すのに用いられやすいということの動機づけとして、こうした要因が働いていると指摘できる。

5. おわりに

語形成の研究において暗黙のうちにであれ広く採用されている考え方として、次のようなものがあると思われる。すなわち「どこかに何かしら定まった語形成規則があるが容易にアクセスできないようになっていて、その規則を様々な手段を駆使して発掘するのが語形成研究である」のような考え方である。認知言語学の立場を採ると、このような考え方は再考を迫られる。個々の話者に目を向けると、各人はそれまでに見聞きした言語使用をたよりに、見よう見まねで言語使用を行っている。その一つひとつの使用が「規則」をそのまま体現しており、と同時に、会話の参与者の間でその「規則」の絶えざる調整が生じているということになる。

いわゆる語形成規則は、そうした無数の使用が生じている共同体の全体を分析者がマクロに見渡して一般化したものにおおよそ対応すると考えられる。その営みはきわめて価値あるものであるが、そこで記述された「規則」をそのまま個々の話者の知識と同一視できるとは限らない（Dąbrowska 2020）。両者を混同すると議論が空転してしまうのである。

参考文献

Aronoff, Mark (2020) -*less* and -*free*. In: Lívia Körtvélyessy and Pavol Štekauer (eds.) *Complex words: Advances in morphology*, 55–64. Cambridge: Cambridge University Press.

Bauer, Laurie, Rochelle Lieber, and Ingo Plag (2013) *The Oxford reference guide to English morphology*. Oxford: Oxford University Press.

Booij, Geert (2010) *Construction morphology*. Oxford: Oxford University Press.

Dąbrowska, Ewa (2020) Language as a phenomenon of the third kind. *Cognitive linguistics* 31: 213–229.

Grabias, Monika (2016) The development of -*free* and its competition with the suffix -*less*: A corpus-based study. Doctoral dissertation, University of Liverpool. http://doi.org/10.17638/03002925

Kikuchi, Yuki (2019) An analysis of *N-free X* and *N-less X* based on construction morphology. *JELS* 37: 59–65.

Oxford English Dictionary Online (OED) https://www.oed.com [accessed May 2021]

Olsen, Susan (2014) Delineating derivation and compounding. In: Rochelle Lieber and Pavol Štekauer (eds.) *The handbook of derivational morphology*, 26–49. Oxford: Oxford University Press.

Schmid, Hans-Jörg (2016) *English morphology and word-formation: An introduction.* 3rd, revised and enlarged edition. Berlin: Erich Schmidt.